



小川広次建築設計事務所

小川 広次

桂離宮の主題による変奏曲 —日本文化に於ける空間の構造的解析—

1960年 東京都生まれ
 1982年 日本大学理工学部建築学科卒業
 第3回学生設計優秀作品展
 1982年～83年 (株) 計画設計工房
 1983年～92年 (株) 谷口建築設計研究所
 1989年 小川建築設計事務所 所長
 1991年～ (株) 小川広次建築設計事務所
 代表取締役

「なぜと問うことに価値がある」

インタビュー：日本大学 輪湖 大元/中村 太一

私は大学3年生の頃から谷口吉生氏の事務所に出入りをさせて頂いて、卒業後にそのままお世話になることとなります。現在は自分の事務所を主宰するとともに、谷口建築設計研究所と協同で規模の大きな建物の設計もしています。私の事務所では主に住宅を手がけていますが、美術館などの公共性のあるプロジェクトも同時進行で設計を進めているわけです。

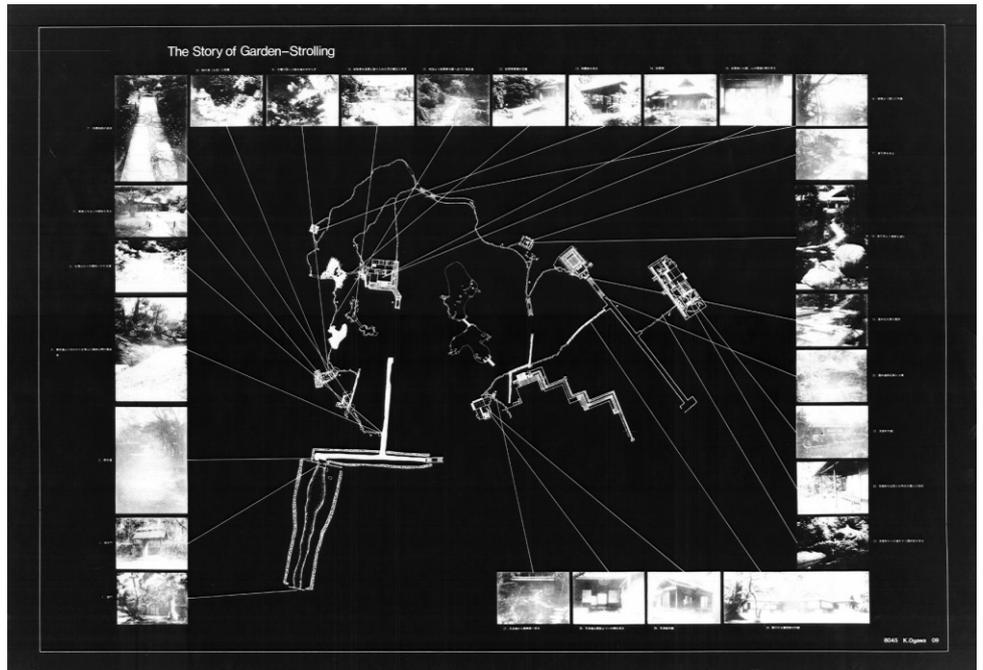
これらは全くスケールの違うものですが、基本的には同じものとも言えます。例えば、建築には椅子やテーブルなどの身近なスケールのものから、都市のスケールのものまでが同居しています。その一方に偏ってしまうと良い建築を創るのは難しい。小さな部分だけにこだわっても、その部分の価値を見極めるのは困難ですし、逆にアーバンに意識が集中してしまうと細かな部分が見えなくなってしまう。これら両方のスケールを意識しながら建築を思考することが重要なのです。また、その様な状態に、或いは環境に強制的に自分を置くように意識しなければ、良い建築家にはなれないのではないかと考えています。

—— その様な考えは学生当時からあったのですか？

最初は単純な憧れからです。例えばコルビュジェ、ライト、ミースは住宅から家具、都市のスケールまでをコーディネートしている。そのことを知り、部分を考えるだけでなく全体をコーディネートすることに憧れたわけです。今では当然のことだと思っています。部分と全体を総合的にコーディネートするということはとても重要な意識だと思います。

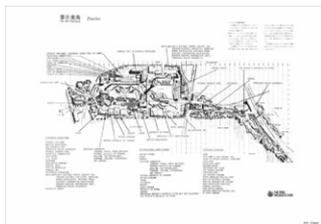
—— 卒業設計ではその様な考えを基に表現したのですか？

今でもそうですが、当時、私が興味を持っていたのは「日本文化」です。日本人から日本文化をきちんと理解したいという気持ちがあった。身近なところでは書道の文字に対する意識や空間感覚とは何なのか？という疑問。或いは、京都に行った時に感じたこの国とも違った街の感覚。この特異性は何なのか？と。今では海外に出て



卒業設計プレゼンテーション

様々な物を見てきて相対的に違いがわかるようになったけど、当時は感覚的に漠然と何かが違うと思っていました。そんな単純な疑問から始まり、日本建築を深く理解したいという気持ちになった。でも日本建築という目に触れる素材、あるいは形とかそういう物がそのまま日本文化だと言われてしまう。それはもちろんそうなのだけど・・・



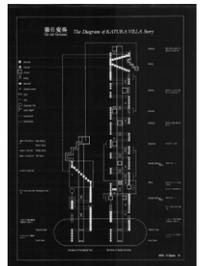
時代において使える素材も違えば使える技術も違う。表現は時代の産物であると考えようになった。つまり建築を造るには製造技術や素材が必要で、それらは時代に呼応したものである。そしてこのことと建築家の意識とは別の流れがあるのではないかと考えた。その視点で振り返った時に、建築のデザインを統括している思想や意思とは何なのか？そこに興味がわいた。表面に見える形を決定づける、人間の背景にある意識を研究したいというのが卒業設計のテーマでした。当時は構造主義が流行していたから、それを使って整理しようと考えた。その対象として桂離宮を研究してみて、この建築に潜む隠されたシステムを抽出す

る。表面上で認識できる形ではなく、その奥にある思想を理解して、それを利用して現代の表現に置き換えたら何ができるかということを考えていました。

私はかろうじて筆が使える。文字は意志の伝達手段でありながら、芸術の領域にまで達している。1つの文字で自分の意思を表現できるし、与えられた領域に対してバランスを見ながら瞬間的に書いていく。その感覚はヨーロッパやアメリカとは明らかに違う。そんな日本の「間」の様な感覚を持っているといたないのでは感性が違う。そして、その感覚は当然建築にも通じていると思う。

—— 最近の学生の卒業設計を見てどう思いますか？

今後、世界が益々グローバルな環境に変化していく中で、何に疑問を感じるかが重要なのではないのでしょうか。又、その問いを持ち続けることが建築家にとって大切だと思っています。建築を目指すということは、自らの存在を発見し認識していくことと同じことなのだから。



図：卒業設計プレゼンテーション